
PILGRIMAGE TO SPIRIT ~ 幻想旅記 ~

ソルダイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

PILGRIMAGE TO SPIRIT 幻想旅記

【Nコード】

N6919Z

【作者名】

ソルダイ

【あらすじ】

魔法と化学が共存する世界

ここでは「聖霊」とよばれる存在が信仰されている。

そして聖霊を祀る「聖域」100カ所を巡礼する儀式「聖霊巡り」を達成すれば夢が叶うという…

そんな世界観で展開される若者達の旅の物語と魔法の世界の少し変わった風土を描いていく予定です。

砂漠の出会い（前書き）

初投稿なので文章もストーリーも問題だらけです。
主人公も終始おちゃらけています。
どうぞ生暖かい目で見守って下さい。

砂漠の出会い

「ああ！クソツ！動け！このポンコツ！！」

そんな聞くにたえない罵声を浴びせながら煙を上げる鉄のカタマリを蹴り続ける男

もとい僕の名前はレイブ・レイバース、聖霊巡り達成のため旅をしているごく普通の男の子だ。

そして今、煙を上げながら僕に蹴りを入れられている鉄のカタマリの名前はジプシー

40年前に製造されたごく普通の二輪車…だったのだがついさっきエンジンがオシヤカになり、僕の中での認識がごく普通の二輪車からごく普通の鉄のカタマリに改まった物体だ。

「しかしこれからどうしたものか…」

ジプシーを蹴り続けていたせいで折れたのではないかと思うほど痛む右のスネをさすりながら僕は言った。

「ああ…でも本当にどうすればいいんだ…」

我が愛しのジプシーがブツ壊れたことで困ったことができた。

ひとつは旅のペースが大幅にダウンすることだ。徒歩は乗り物に比べて圧倒的にスピードが遅い。

徒歩と筏^{いかた}だけで聖霊巡りを達成した人もいるが、達成までに20年近くかけていると聞く。

僕はジプシーが壊れるまでに12カ所を巡礼したから残りは88カ所もある。残りをすべて徒歩で回ろうとすると自分の半生を捧げなくてはならない。

僕には色々夢がある。だから旅だけに半生を捧げるなんてまっぴらごめんだ。この旅は夢を達成するための足がかりなのだ。

ちなみに僕は旅行をするときは2泊3日で済ますのが望ましいと考えている。それ以上長くなると僕の場合、軽いホームシックにかかってしまうからだ。つまり僕は今、尋常でないほどの懐郷病と戦いながら旅をしていることになる。(まあこれは冗談だが)

だがこの問題はどこかで新しい乗り物を買えば解決する。それほど深く考えることでもない。

だがしかし二つ目の問題は非常に重大なことだ。

二つ目の問題それは…

僕が今いる場所が世界一広い砂漠のド真ん中と言つことだ

正直これは相当マズイ。はっきり言って生命の危機だ。

世界一広い砂漠こと、ここビゴツツス砂漠は世界一を誇る広さと猛烈な暑さ、そして発音のしづらさでその名を知られる乾燥地帯だ。ひとたび迷えばあっという間に干物になってしまっ、というのは近くの町の住人Aの談だ。

僕はこの住人Aの発言を正直あまり気にかけていなかった。

『あー今ビゴツツツって噛んだな』程度にしか考えていなかった。しかし今思えばもつと真剣に聞いていればこんな事にはならなかったはずだ。なぜならその住人Aはバイク店をやっていたからだ。住人Aの勧め通りに新しいバイクを買っていれば僕は無事に砂漠を越えられたはずだったのだ。

そして住人Aはこんなことも言っていた

「ビゴツツス砂漠にオアシスは無い」

ちなみに僕の水筒の中身も無い。ついさっき飲み干してしまった。

そう、僕は今完全に詰んでいる。この状態では死なない方がおかしい。そんな感じだ。

ああ…生まれてきてから今までの出来事が走馬灯のように…

軍人の家に生まれ、厳しい父の元に育ち、世界一の剣士を志し、聖
霊巡りの旅に出て、そしてひとり寂しく砂漠で干からびて…

ピシピシピシピシッ

…とせつかく感傷に浸っているところなのに何か顔に当たる感觸
がした。

「つて砂嵐じゃん!!」

なんと走馬灯を見ている間に巨大な砂嵐が目前までせまっていた。
干からびるより先に砂嵐に巻き込まれて死ぬことになるのか。まあ
干からびるよりは苦しまずに済みそうだが。

「レイブ・レイバース 砂漠に死す、か…」

「なーにカツコつけちゃってんのよ、そのあんた」

え？誰か来た？

「ほら、ボーっとしてたら死ぬわよ。早く乗って。」

「え？あ？はい」

僕は言われるがまま車とおぼしき物に乗り込んだ。これで何とか砂
嵐で死ぬということは無くなったようだ。

「それじゃ飛ぶわよ。フロル、ルーク、浮遊石の準備して。」

「あいよー」

「えーまた飛ぶのー!?!」

ん?なんか飛ぶとか浮遊石とか聞こえるんだけど…

「ほら、あんた何かに掴まってないと危ないわよ。」

ダメだ状況がまったく飲み込めない。だが他にどうすることも出来ないのとおりあえずさつきから命令しかしていない女の子の足に掴まってみる。

「っ! ふざけんな離れろ!!」

女の子はそう言いながら拳銃を眉間に突きつけてきた。

「撃ち殺す!!」

「うわっ!ごめんごめん!冗談だから冗談!」

ヤバイ、若気の至りでまたしても命の危機に晒されている。ていうか会って数分の人に殺す宣言されてしまった。

「はいはいお二人さんそれくらいにして。テイクオフするよー。ルークも覚悟決めて」

「うっ…でも怖いものは怖いよお…」

「ほら、テイクオフとか言ってるから！早く何かに掴まらないと！」

「私の足以外でね。2度目は即射殺よ。わかったわね」

ここまで言われたら逆らいようがない。とりあえず近くにあった棒に掴まっておくとしよう。

「それではー ニーズヘッグ号テイクオフ！」

運転席に座っている方の女の子の掛け声と同時に車は砂嵐に飲まれ強烈な風で舞いあげられた…

つてこれ落ちたら死ぬんじゃないか？さっきから水が無くなったり砂嵐に飲まれそうになったり初対面の女の子に射殺されそうになったりと死にそうな目にしかあっていない。もしかして神様は僕に死ぬといっているのだろうか。

「さてさて、いい感じの高度まで上がりましたのでえ、お待ちかねの浮遊石はつどー！」

運転席の女の子がこちらの気も知らずハイテンションで掛け声をかける。

するとさっきまでであった無重力感が消え、代わりに全身が不思議な感覚に包まれた。

「なにこれ…なにこの感覚…」

「あんた、浮遊魔法は初めてなの？確かにこの感覚は最初の内は

不思議なものよね。窓を見てみなさい。」

逆らうと撃ち殺されそうだからとりあえず命令に従って窓を覗いてみる。すると…

「うわ…ほんとに飛んでるよ…すげえ…」

眼下にはただただ広い砂漠が広がっていた。そして車の下を大きな砂嵐が通り過ぎていつている。空には無数の翼竜が飛び交い、地平線の遙か彼方には小さくキャラバンの姿が見える。

茶色だらけで色気がないと思っていた砂漠がこんなにも幻想的に見えるなんて…

この景色を一生忘れないだろう。僕は女の子のフトモモを見ながらそう思った。

ジャキ…

「うわあ！ごめんごめん！もう見ないから殺さないで！」

こうして僕と謎の一行を乗せた車は空を飛びビゴツツス砂漠を越えたのだった。

「砂漠も越えたし、もうあんたとはお別れね」

女の子は僕を冷たい視線で見ながら言った。どうやらフトモモを見つめたせいで完全に嫌われたらしい。だが僕は仲間になることを諦めない。移動手段とフトモモのために。

「せめて君たちの名前くらい教えてくれないかな。一応命の恩人なわけだし。」

「……………私はリズ・メイネル。そっちのバカっぽいのはフロル・ケイニス、メガネかけてビクついてる方は

ルーク・フォングレイよ」

まさか本当に教えてくれるなんて思わなかった。僕が思ってるほど嫌われてないって事かな？

「私たちの名前を知ったからには死んでもらうしかないわね。」

普通に嫌われていた。

「あたしたちは13人で聖霊巡りの旅をしてるんだ。」

「うん。12カ所目まで回ったんだ……」

「ちょっと！あんた達何でこんな奴に教えちゃうのよ！」

！まさか目的も達成率も一緒だとは……
もしかしたらこれは運命かもしれないな。ということでアタックをかけてみよう。

「実は僕も聖霊巡りの最中で君たちと同じで12カ所目まで回っ

「ただ。」

「おーそーなのかい。じゃーあたし達と仲間だなー」

「そう。だから僕も君たちの仲間にして欲しいなーと思って。バイク壊れちゃったし。」

それにもっとリズちゃんのフトモモを見ておきたいし。

「ね ねえ、旅は人数が多い方がいいし仲間にしな...?」

「イヤよ!こんな変態を仲間にするなんて!」

...やはりリズちゃんの目にはそう映っていたのか。

「リズーでもこいつ見たところ剣術使えそうだぞー対魔物要員としてじゃダメかい?」

「フロルちゃんナイスフォローだ!あともうー押しすればいけるはずだ。」

「もし魔物が襲ってきたら僕が全部相手するからさ。だから仲間にしてくれないかな?」

「なあリズー」

「リズちゃん...」

「わかったわよ。仕方ないわね。仲間にしてあげるわ。」

「！ ありがとう！これで移動手段が確保できた！」

「ただし」

やはり条件付きか。まあそこら辺のことは想定内だ。ドンと来い！

「あらゆる肉体労働はあなたにやってもらいわ。当然ニーズヘツ
グ号の運転もね。」

ぐ…なかなかきつい条件だ… だが体力にはそこそこ自身がある。
まだ何とかなるレベルだ。

「そしてもう一つ。絶対に私に触れないこと。一度でも勝手に触
れたら即射殺。わかったわね。」

ぐはあ！その条件を飲んだら仲間になる意義のほとんどを失ってし
まうじゃないか！

だが…背に腹は代えられない…！

「わかったよ。その条件で仲間になろう。…グス」

「それじゃあ早速食べられそうな魔物を獲ってきなさい。最低で
も5匹獲ってこないと射殺するわよ。」

こうして少しおかしな僕と仲間の旅が始まったのだった…

続くのか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6919z/>

PILGRIMAGE TO SPIRIT ~ 幻想旅記 ~

2011年12月23日06時48分発行